# 人物で語る日本デンマーク

## ③ 山崎延吉（のぶきち）Ⅱ

山崎延吉は、愛知県立農林学校の校長としてだけではなく、県内務部第七課長（農務課長）、県農事試験場長、県農会幹事をも兼務した。さらに一九二〇年（大正九年）校長退職後は、帝国農会主席幹事、一九二八年（昭和三年）には第一回普通選挙で衆議院議員に当選し、県政や国政の面からも農村の近代化に尽くした。

そんな山崎延吉がその生涯をかけて行った最大の事業は、興村行脚（あんぎゃ）といわれる農村振興のための講演活動であった。教育を学校に閉じ込めておくのではなく、社会に延長していくことが大切であるという彼の教育理念の実践であった。

山崎延吉が本格的に講演活動をはじめるのは、一九〇六年（明治三九年）に農林学校で行われた自治講習会からである。政府の地方改良運動にあわせ、県内はもとより全国各地で地方改良及び農村自治の題目で講習会が開かれ、彼は講師として招かれた。彼は、地方自治の大切さを説き、都市のみ繁栄して栄えた国はなく、国を興隆させるにはその根である農村の振興に力を注がなければならないと主張した。そして、農事改良の推進、産業組合の奨励、青年会の育成など、近代化の具体策を示し、旧態依然たる農村の改良を訴えた。

一九二三年（大正一二年）、碧海郡依佐美村の野田小学校で、七日間の農村文化講習会が開催された。参加者は、全員農家に分宿して共同生活し、講話、作業、懇談会、唱歌、体操、娯楽などスケジュールを決めて行われた。こうした講習会は、やがて全村学校として全国に広がり、農民の共同意識を高め、村おこしの機運を高めていった。山崎延吉は各地で講師に招かれ、農業経営改善の方法や生活習慣の改善について講話をした。

一九三〇年（昭和五年）、米価の下落から農村恐慌が深刻化していく中で、政府は、農山漁村経済厚生運動を実施した。山崎延吉は、全国各地から招かれ、精力的に講演活動を続けた。疲弊した農村を立ち直らせるため、町村単位の調査をもとに、農村経済厚生のための基本計画を立て、問題点を改善していくというものであった。彼は、農業経営においては米麦の単作ではなく、労力の余剰を養蚕や養鶏、野菜、果樹栽培へまわし、収入を増やすことをすすめた。さらに産業組合の活動を活性化し、購買や販売、金融、農業倉庫の経営を通して協同化をすすめた。また、医療施設や図書館、水道、道路、運動施設、公会堂の建設を通した社会改良の指導や教育、宗教、衣・食・住にかかわる生活改善の指導まで行った。

このように明治・大正・昭和と続いた山崎延吉の興村行脚は、農業の近代化を図り、農村の繁栄、農民の生活安定を願うものであったといえよう。山崎延吉の講演回数は生涯を通じると一万五千回以上になったといわれるが、実に超人的数字を示している。彼の農民を思い、農村教育にかけた情熱を読み取ることができる。

文　三上裕保

▶山崎延吉の興村日記

▶興村行脚の旅装